

文化と政治の関連性があるかどうか

—中国の歴史上の作品と人物から見る

2012年から尖閣諸島など、我が国の領土領海をめぐる国家間の圧力が高まり、その消極な影響は産業のみならず、一時的に観光や芸能のよう娯楽分野まで及んでいると報道されている。しかしその一方で「文化と政治は別」と言い、交流を頑張ろうとしている人もいる。私自身も「one piece」の大ファンだけど、こうした意見には賛成したいが。正直に言うと、違和感も感じてしまう。

周知の通り、中国は「詩」の国である。所謂「文」はみな「詩」の基礎の上に発展してきたものである。詩歌のなかに蓄積された中国の文化と伝統、それは審美観・芸術心理・鑑賞態度などを含めて全て、他の文芸形式よりはるかに深く厚い。古代の中国から詩と政治の関係が緊密につながっている。その関連性について、屈原の「離騷」という例を挙げたい。「離騷」における創作及び政治背景については司馬遷が『史記・屈原列伝』に劉安の『離騷伝』の説を引用した。“屈平疾王听之不聪也，谗谄之蔽明也，邪曲之害公也，方正之不容也，故忧愁幽思作《离骚》，离骚者，尤罹忧也。”屈原が嘘偽りのない誠実な人であり、朝廷のいつもおべっかを使う大臣に嫉妬され陥れられた。その時、彼は溢れんばかりの憤懣を「離騷」で現れさせた。この作品では単に詩人屈原個人の不幸な遭遇だけでなく、作者本人が庶民にたいする同情するその優れた考え方も溢れている。すなわち“哀民生之多艰”という文から見える。この作品は当時の政治と作者の理想をうまく結びつけた。歴史上で最大で一流である素晴らしい宝物と言えると思う。

中国近代史においても、傑出した詩人や優秀な学者は多く出現した。聞一多はその一名である。彼の一生はそのすべてが中国と西洋の文化を結び合わせようとした不断の努力であつたそうである。聞一多は新詩の形式を模索し若い詩人たちと『晨报』を共同で創刊し新詩格律を形成した。晩年の聞一多は民主運動に身を投じた。1944年、中国の政治・軍事が深刻な危機に面した時、彼は象牙の塔を出でて声高く「打倒孔家店」を叫んだ。この年、彼はアメリカの副大統領ウオーレスに対して正面から国民党の政策を批判し、大人たちは青年に学べと呼びかけた。国民党の第五軍座談会の席では、軍の長官にこう言いだした「討論すべきことなど何も無い。やるしかないのなら、非常時には非常手段をとるべきだ」と。このようなことから分かるのは、彼が詩人の情熱と学者の実直さで社会問題に向き合っていたということである。1946年聞一多が国民党で暗殺されたニュースは、社会と世論を騒然とさせた。聞一多は小さい時からアメリカの教育を受けて育った知識分子であり、かつ文学と学術の世界に大きな業績を残した文学者である。それが政策に対する意見が違うため、筆と言葉で人々の思いを表したというだけで、このような目に遭うという事は、当時の中国人にとって受け入れがたい現実であつただけでなく、西洋的な考え方をする人にとっても理解しがたいことであつた。

7月17日午前、国民党と共産党の対立の調停をしていたマーシャルは周恩来のところ

でこの事件を知り、そのあまりの意外さに、周とともに「驚き、そして憎悪した」という。アメリカ駐在大使ストレーンは国務長官ベルナーに聞一多の事件を報告した。マーシャルは廬山で蒋介石に会い、昆明での暗殺事件によって、「アメリカの世論が蒋介石に対して不利になる」であろうこと、「暗殺の対象が中国で最も教養のある人々に向かったこと、その中の多くがアメリカの大学を卒業していること、アメリカ人は彼の貢献を、内戦を引き起こしているそれも教養のある軍事指導者の幾人かと比較してみるであろうこと」を指摘した。ストレーンもまたこの事件が国民党政府が知識分子と大衆の中で支配力を失っていく要因になるであろうことを指摘した。このことはアメリカサイドが正式に国民党に批判を行ったことを示しており、ここに至って蒋介石もことの重大性の気付かされたのであった。

聞一多が死後40年後、台湾の『伝記文学』は聞一多の死の影響を「北京・天津などの重用都市が陥落したことと同じほど大きい」とまで言っている。ここから分かるのは、聞一多の死が、善良ではあるけれどもまだ左右に揺れていた多くの知識分子の目を醒ませ、そのことによって、国民党と共産党が中国の運命の決定権を勝負していた中で、双方の力関係の変化に、明らかな作用を与えたことを語っている。

以上の話により、文化と政治は離れがたい関係を持っていると思う。各時代において、その時代に応じた数えきれない作品がでてくる。その一方今まで人の心に響きを強く感じられる文学作品がほとんど当時の政治の色を染め、広く深く伝わっていくのである。つまりお互いに影響を受けながら歴史が前に進んでいくだろう。